

三田メディアセンターの選書： DDA導入の経緯とその後の変化

すぎやま よしこ
杉山 良子

(三田メディアセンター課長)

1. はじめに

本学では2016年4月から電子ブックの新しい2つのサービスを導入した。当初、湘南藤沢キャンパス（以下「SFC」とする）での実験（試行）という位置づけで始まったが、蔵書検索システムであるKOSMOSに書誌データが搭載されたことから、急遽、全キャンパスに展開することになった。本稿ではDemand-Driven Acquisition（試読型選書システム、以下「DDA」とする）導入が、三田メディアセンター（以下「三田」とする）における利用者からの購入希望にどのような変化をもたらしたか、選書担当業務に与えた影響について報告する。

2. 新しい電子ブックサービスの導入

(1) ProQuest Ebook Central Mediated DDA

導入したサービスのひとつ、ebrary Academic Complete with DASH!（導入後ProQuest社のEbook Central, Academic Completeに名称変更）は直近10年以内に出版された電子ブック約12万冊を同時アクセス無制限で利用出来る年間購読型のデータベースである。直近1年に刊行された新刊は含まれておらず、さらに年4回収録タイトルの入れ替えがあるものの、これを導入することにより、以前なら冊子体の購入希望が出されないと利用できなかった図書の一部が利用可能になった。

もう一方のサービス、ProQuest Ebook Central Mediated DDA（以下「Ebook Central DDA」とする）は洋書70万冊以上の電子ブックを利用者が5分間試読したうえで、図書館に直接オンラインで購入希望を出せるというものである。こちらは新刊も追加されるタイプで、試読したうえで購入希望を出せる画期的なものであった。

4月6日のサービス開始段階ではKOSMOSでタイトル検索が出来なかったため、利用者からあまり反応がなかったが、6月8日に70万件のデータが搭載されたところ、一気に利用の動きが出た。それま

でKOSMOSでは所蔵資料しか検索できなかったが、Ebook Central DDAを導入したことにより、英語で書かれた図書が多いものの、海外で出版されているさまざまな主題の図書の検索が可能になり、全キャンパスからSFCに購入希望が殺到した。SFCがDDAに取り替えた予算は6月中旬ですでに全体の約4割を消化、購入希望はSFCの関連主題を中心として選定されるため、三田からの購入希望が受け付けられないことが増えた。そこで急遽6月13日から三田でもDDAによる購入希望に対応することになった。初年度の購入希望件数1,279件の各メディアセンターの内訳を表したものが図1である。

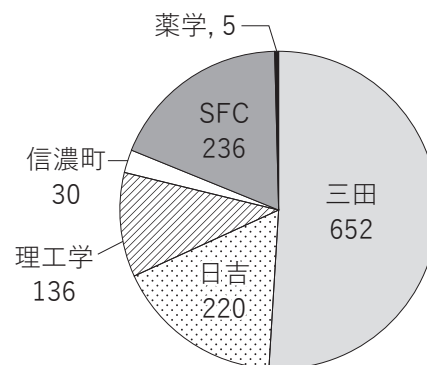


図1 DDA申込件数（2016/6/13～2017/3/7）

三田のDDAによる購入希望は約400万円、教員からのリクエストも40万円を超える結果になった。2016年度は電子ブック購入予算として300万円を計上していたが、購入希望とは別にスタッフが選書する分を加えると、当初予定していた倍以上の金額になった。

82万冊という膨大なデータには、購入資料と同様に無制限に利用できる年間購読型の資料と5分間しか利用（試読）できない資料が混在することで、利用者から問い合わせが続いた。当初三田では購入希望のひとつの手段と考え、敢えてDDAの広報は行わなかったが、いろいろな会議体で教員に説明す

特集 電子ブック：試読型選書システム（DDA）を導入して

ると同時に、ちらしの配布、Webでの広報を行うことにした。また、スタート当時はEbook Central DDAの購入希望画面に冊子ではなく電子ブックのリクエストであることが書かれていなかったため、試読してから購入希望を出せるリクエストフォームと誤解され、冊子体の希望も散見された。そのため急遽、電子ブックの購入希望であることを画面に明示するように改訂してもらった。

DDA開始から2018年7月までの申込件数と購入結果が表1である。

表1 Ebook Central DDA申込件数と購入状況

	申込件数	所蔵済	電子購入	冊子購入
2016/6～2017/3	652	202	342	51
2017/4～2018/3	983	221	575	22
2018/4～2018/7	388	80	248	1

冊子体がすでに所蔵済みの場合、電子ブックを重複して購入しないことを連絡すると、多くの利用者は冊子体があれば電子ブックは不要と返答している。タイトルを検索するとKOSMOSでは電子ブックが優先的に上位に表示されるため、後ろの方に出てくる冊子体の所蔵まで確認しないためと思われる。冊子体の所蔵を見落とす利用者が一向に減らないため、スタッフが毎日のお断りのメールを出すことになったのは予想外のことだった。

(2) 丸善eBook Library (MeL)

和書の電子ブックについては、2007年11月からNetLibrayで提供されていたが、当時はスタッフが基本的な全集を選定したり、シラバスを確認する際、利用が集中しそうな図書や教員著作を購入するくらいで、すでに冊子体の所蔵があるものを電子ブックで重複購入することについて、まだあまり積極的ではなかった。特に広報をしていなかったため、電子ブックの存在は利用者あまり知られることがなく、和書の購入希望は皆無だった。2012年2月から丸善eBook Library（以下「MeL」とする）というプラットフォームでの和書の電子ブック販売がスタートした。その後冊子体と電子ブックをセット購入すると電子ブックが安価になる新刊ハイブリッドモデルが提供されるようになったが、

依然として三田では冊子体だけの購入が多かった。しかし慶應義塾大学出版会の刊行物だけは冊子体に加え電子ブックも購入することにした。その後2016年度からMeLの試読モデルを導入、限られた出版社ではあるがKOSMOSに和書の電子ブックが搭載され、試読が出来るようになった。そこでようやく、利用者に和書の電子ブックが浸透し始めた。

毎月スタッフが利用統計を確認し、利用回数が多い図書を選定するようにした。2017年12月以降、Ebook Central DDAと同様、利用者が試読を経てそのままWebで購入希望を出せるDDA方式になった。この方式になり、利用者からの購入希望件数が増加した（表2）。

表2 MeLの申込件数と購入状況

	申込件数	電子購入	冊子版購入	謝絶
2017年12月	7	3	0	4
2018年1月	5	1	0	4
2月	3	2	0	1
3月	4	2	0	2
4月	7	4	0	3
5月	28	6	0	22
6月	19	5	1	13
7月	33	16	1	17
合計	106	39	2	66

号単位の雑誌、実用書などのデータが搭載されるようになり、選書基準から外れるため受け付けられないケースも増えているが、申込件数は明らかに増加している。洋書と同様、冊子体をすでに所蔵している場合は原則的には重複購入しないが、書庫狭隘化のために冊子体の複本購入を控えているため、貸出回数が多い資料は電子ブックも購入するようにしている。MeLには同時アクセス無制限という契約形態がない点、さらに出版社によってはダウンロード不可のものがあることなど、今後、契約条件の改善を期待している。

3. 三田における購入希望

三田で購入希望をオンラインで受け付けるようになったのは全学で最も遅い2008年で、この10年間の申

込状況は表3のようになっている。

表3 オンラインリクエストの申込件数^{*}と購入状況

	申込	購入	和書	洋書
2008	1,063	822	253	569
2009	842	615	197	418
2010	715	537	149	388
2011	716	513	126	387
2012	739	574	142	432
2013	908	756	193	563
2014	866	736	148	588
2015	909	616	156	460
2016	747	498	199	299
2017	1,018	592	170	422

(※Ebook Central DDAからのリクエスト数を除く)

従来から三田での購入希望は圧倒的に洋書が多い。和書については、学術書とされる資料はほぼ網羅的に収集しているため、ある程度充足していると考えられるが、洋書についてはスタッフの選書には質、量ともに限界がある。申込件数が最も多いのは大学院生からで、文学研究科、法学研究科の学生が目立つ。希望理由としては、学位論文作成のため、研究に必要というものが多い。2016年度は減っているが、Ebook Central DDAからのリクエスト数を合算すると、申込件数は1,399件、洋書の購入冊数も682冊となり前年度の約1.5倍になっている。さらに2017年度はオンラインリクエスト数だけでも1.36倍に増加、DDAを合算すると2,000件を越え、申込件数は爆発的に増加している。これは膨大な数の洋書の存在が明らかになったこと、さらに5分間の試読だけでは事足らず、全文を読みたい利用者が購入希望を出すようになった結果と思われる。

オンラインリクエストでは冊子体の購入希望を前提としていたが、DDA開始後、冊子体か電子ブックのどちらを希望するかを指定してもらうようにした。電子ブック指定が10件から34件へ、冊子体、電子ブックのどちらでも可というものが17件から86件へと増加しており、明らかに電子ブックの利用が浸透し始めてきている。DDA導入から3年目に入り、オンラインリクエストフォームは冊子体または何ら

かの理由によりDDAで申し込めない電子ブックの購入希望に用いられるようになってきている。

4. 大学図書館のコレクション構築

従来、大学図書館ではJust in Case、つまり利用者がいつか使うかもしれない資料を、将来の利用環境を保証するためにあらかじめ選定、収集し、コレクションを構築してきた。しかし電子資料が普及するようになり、所有ではなくアクセス、すなわち利用でできれば良いという考え方が出てきた。

長い間、いつかの利用のために所有してきた資料がスペースを圧迫し、書庫狭隘化を加速させてきた。そこでまずは洋雑誌の冊子体を中止、電子ジャーナルアクセスに変えることで、ものの増加を減速させた。次にスペースを占領しているマイクロ媒体で購入したアーカイブコレクションや新聞などが、購入から時間が経ち、劣化が問題視されていたところ、少しずつ電子化されるようになった。そこでそれらを少しずつ契約することにした。三田ではまだマイクロ資料を所有しているが、他のキャンパスでは書庫スペース確保のため、電子的なアクセスが可能になったものから、やむなく手放している。

今まで収集してきた資料の中でも、ことに洋書は貸出記録があるものは少なく、蔵書回転率が低いことが分かっている。一方、購入希望により購入した資料は確実に利用が見込まれる。近年では図書も電子ブックが普及するようになり、特に洋書はJust in Time、必要な図書を、必要な時に、必要なだけ収集すれば良いのではないかと考えにシフトしてきている。DDA導入はまさにそれを実行に移したものである。

メディアセンターでは2015年に書庫スペース抑制のための図書選定の指針を作成、電子ブックの積極的導入を打ち出している。洋書については原則的に電子ブックを優先させ、冊子体の購入を控えることとしているが、和書については電子ブックを優先させることが望ましいが、今までの利用を考えると冊子体の購入を選択する場合もあるとしている。現状ではスタッフによる洋書の冊子体の選定は抑えるようにしているものの、和書はやはりまずは冊子体を購入、貸出回数が多い資料などを複本購入する場合、電子ブックを購入するケースが多い。

5. DDA導入後の選書業務の変化

(1) 重複調査

KOSMOSに試読タイトルが搭載されるようになり、重複調査に時間がかかるようになった。冊子体の所蔵確認はAlephを確認するだけで良かったが、電子ブックについてはさらにKOSMOSを検索、本文が読めるかを確認する必要がある。同一タイトルでも提供元が異なると、複数の書誌が検索される。タイトルが検索できた場合、すでに契約済みで全文利用出来るか、試読が出来ているだけなのかを確認する必要がある。タイトルが検索できなくてもデータベース等に収録されている場合もあり、出版社にも気を配る必要がある。このように、重複調査がとても複雑かつ煩雑になっている。

(2) 媒体確認（冊子体か電子ブックか）

DDAが導入され、内容による購入可否の判断に加え、電子ブックで購入出来るか、よりよい提供元はどこかなどを確認しなくてはならない。電子ブックの場合は提供元によって利用条件が異なるため、発注する前に、利用者の希望通りに購入できるかを調べる必要がある。

例えば、個人のみを対象としていて図書館には販売しない、あるいは図書館には複数タイトルのセットでないと販売しないという場合がある。またゼミの輪読などで複数の利用者が同時に利用するためには電子ブックの方が便利であるという理由で購入を希望されても、同時アクセス数が無制限あるいはダウンロード可という条件で販売していない電子ブックもある。このような場合は利用者に確認したうえで冊子体を購入、またはお断りすることになる。

価格の観点もある。電子ブックの場合は提供元、刊行年、利用条件などによって価格が異なる。洋書は冊子体と同額またはそれより安価な場合もあるが、和書は冊子体の2～3倍の高額な設定になっているものが多い。電子ブック購入のための予算枠を作ったのは2005年で当初は50万円だったが、すでに1,000万円を超える予算額となっている。限られた予算内で冊子体、電子ブックのどちらを購入すべきか、さまざまな調査をしたうえで、さらなる判断が必要になっている。

書庫狭隘化のことを考えると電子ブック購入を優先的にするのは必然かもしれないが、必ずしもそう

とはいえない。なぜならば、和書か洋書か、専門主題は何か、価格の優位性など、利用者によって電子ブックと冊子体のどちらを購入すべきかの判断が変わってくるからである。資料購入の可否だけでなく、適切な媒体での資料収集、利用環境をどのように作っていくのか、さまざまな判断に頭を悩ませている。

6. 今後の課題

ひとつは利用面でのサポートである。三田で購読している洋雑誌の多くが、書庫狭隘化対策もあり、冊子体から電子になり、さらに大手出版社のパッケージ契約に伴い電子オンリー化が加速した。そのため、在籍者以外の利用者は洋雑誌を利用することが出来なくなった。そこで2011年度から4年間、スタッフによる電子ジャーナルの論文の代行印刷サービスを行った。2012年度からは卒業生などの非在籍者が特定端末を使って直接電子ジャーナルを利用できるようにしたところ、利用は毎年増えている（図2）。

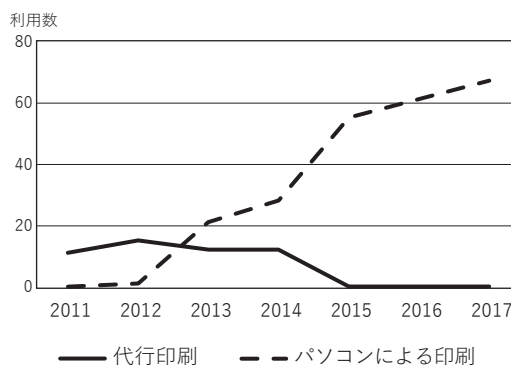


図2 非在籍者の電子ジャーナル利用数

卒業生からは電子ジャーナルだけでなくデータベースも利用したいという声があったが、DDA導入後はさらに電子ブックの利用希望も増えている。冊子体であれば、図書館に来館すれば誰でも利用することが出来るが、データベースや電子ブックは、運用上、非在籍者は利用できないため、このままでは閲覧出来ない資料が増え続けることになる。電子ブックの購入が急速に増えている今、非在籍者へのサービスをどう考えていくか、購読契約の見直しなどを含め、早急に検討が必要であろう。

もうひとつは選書と予算配分である。従来はキャンパスごとにそれぞれの主題に応じて、構成員のた

めに選書していれば良かったが、電子ブックの場合は全学での契約になるため、キャンパスを越えた蔵書構築を考えていかなければならない。従来通りに冊子体を借りて読みたい利用者も多いが、これからの非来館型図書館サービスの拡充を考えると、電子ブックの充実が必要である。特に人文・社会科学が主題となる三田、日吉、SFCの3キャンパスでは分担収集、支払調整を進めていくことが望まれる。和書の学術書は電子ブックも出版社ごとに分担して網羅的に収集する、高額なレファレンスブックは事前に支払分担を調整したうえで購入する、などを検討していけると良いだろう。

三田の場合は資料購入予算が細分化されていることが大きな支障となっている。資料を購入するための予算が、学生用と研究者用と別々にあり、研究者用の予算は各学部、専攻ごとに分かれている。さらにその中は冊子体購入のための図書支出、電子ブック購入のための図書資料費に分かれている。同じタ

イトルでも冊子体か電子ブックかによって予算項目が異なり、常にどの予算で購入するかを指定する必要があるため、処理が煩雑になっている。2019年9月からは新システム (Alma) への移行が決まっており、それに先立ち、予算項目の見直しを開始している。発注処理を簡便にするために電子購入予算を集約する予定だが、先々、図書予算の一本化が理想である。将来的には、電子ブック購入のための予算については全学の予算を統合、慶應義塾全体で必要な資料の選定、支払が行えるようになると良い。

最近では、電子ブックを購入してもらったが、やはり冊子体も必要であるという声や、冊子体はすでに所蔵しているが電子ブックも必要である、という希望が増えている。いつでも、どこからでもアクセスが出来、利便性で優位な電子ブック、誰でも利用可能、熟読するために必要な冊子体、限りある予算の中でどのように利用環境を整えていくかを引き続き考えていきたい。